

気候における自然変動の大きさを忘れてはならない

杉山 大志 (すぎやま たいし) 一般財団法人キャノングローバル戦略研究所 研究主幹

ロジャー・ピールケ・ジュニア

監訳 キャノングローバル戦略研究所 研究主幹 杉山大志 訳 木村史子

本稿はロジャー・ピールキー・ジュニア

The Underappreciated Importance of Climate Variability: A graph that changed how I think about extreme weather and climate, The Honest Broker, 2025.5.6

<https://rogerpielkejr.substack.com/p/the-underappreciated-importance-of>

を許可を得て邦訳したものである。

本稿掲載のモノクロ図表は上記 URL を参照してください。



アダム・ファン・ブリー、1611 年作
凍ったアムステル川でのスケート

気候に関する最も広範な誤解の一つは、気候に関する論文を発表している人たちですら、測定された気候変数に長期的なトレンドがあれば、それは IPCC が定義するところの気候変動を意味する、と信じていることである。実際には、「長期的」とは数十年分の観測に過ぎないことが多い。

観測データの傾向には、気候の変動を示すものもあれば、示さないものもある。極端な気象に関しては、その違いを見分けるのは容易ではないのだ。この投稿ではその理由を説明する。

IPCC AR6 では、気候の変動を検知するには、そのトレンドが単に自然変動（訳注：本稿では climate variability を自然変動と訳する）によるものではないという確証が必要だとして次のように説明している。

「ある気候の変動が観測で“検出”されるのは、内部変動（訳注：大気や海洋の振動など、自然の変動のこと）